

## 『生活水準(日本経済の分析)』

春秋社 1964年9月 181ページ

この本の構成は、第1章「生活水準の経済理論」…伊大知良太郎、第2章「家計支出の分析法」…今井賢一・倉林義正・宮川公男、第3章「都市の生活水準」…永山貞則、第4章「農村の生活水準」…野田孜、となっているが、全体で178頁あるうち第3章・4章で113頁と約2/3のウェイトを占めている。執筆者の人数は前半が4名、後半が2名で、人数のウェイトは頁数と逆に前半に偏っているが、通読した感じでは後半の実態分析に対して前半が導入部をなしているようである。

第1章は、I 経済循環の中の生活水準、II 経済変動の中の生活水準、III 生活水準の階層格差、VI 生活水準の国際比較と長期予測の問題点、の4節に分れているが、ひとくちに言えば、ここでは主として機能的側面からする生活水準の概念規定が行なわれ、さらにそれに伴う分析用具の説明が与えられている。I節では「暮らし向きは経済循環のアルファでありオメガである」として、第1に「国民の明日の労働力が暮らし向きの中で準備され、暮らし向きの高低は労働生産性の動向に連なる」ことが強調されるが、さらに第2として「暮らし向きが1国の経済の最終需要の主要素であり、したがって生産構造を決定するという機能、第3に所得の消費と貯蓄への配分が労働と資本の生産性参加程度に作用するルートが指摘される。ここで生活水準は家計消費支出によるいわゆる消費水準、もしくは生活環境施設からの便益を含む広義の消費水準として規定される。さらに貯蓄をも含めれば生活水準即所得水準と見てもよいとされる。

II節では成長・循環の局面における生活水準の変化が扱われ、これを分析する際に、平均消費性向に対する限界消費性向といった、限界的指標が変動把握のための拡大鏡的触覚として利用されることがまづ説かれ、ついで消費パターン変動の分析用具として弾性係数ないし弾性値が説明される。これに関連して、階層別データに対するエンゲル関数としては直線形が、時間的変動に対してのそれは対数線型が便利であると述べられている。

III節のアレン=ボウレイ的分析の紹介を基礎としてVI節では国際比較を手がかりとする長期予測の可能性が論じられている。第1章は全体として著者一流の巧みな話術で消費分析への、計量経済学的というよりはむしろ経

済統計論的な入門講義がなされていると見ることできる。そして、ここで規定されている意味での生活水準が「人的能力」とか「生活環境施設」とか新しい側面と結びつけられている点で現代的である。

以上のイントロダクションにもとづいて第2章では家計調査データを主とする消費分析の方法、とくにエンゲル関数の各種関数型の特徴と測定法が証明される。

関数の解釈では、とくに飽和水準、所得弾性とぜいたく品・必需品の区別などが扱われる。計測法としては最小自乗法の手ほどきがなされ、後半で光熱費を例としたクロス・セクションおよび時系列分析によって測定の実際ならびに測定結果の解釈のしかたが例示されている。ここでは分析にさきだつデータの処理法まで具体的に例示してあるから、これから分析を行なおうとする読者には貴重な知識を与える。ただ、この第2章のみ執筆者が3名であるにもかかわらず頁数は26頁と最も少ない。おそらく手持の豊富な材料をここまで圧縮するには相当の苦心があったものと察しられる。これだけ簡潔に要点を網羅するには高い能力を必要とするが、簡潔にまとまりすぎて不馴れな読者、すなわち最小自乗法の理解から入らねばならぬ読者にとっては、II節に示されるかなりsophisticateされたエッセンスを消化するのに骨が折れはしまいか。むしろ最小自乗法の説明は割愛してII節の説明をも少しゆっくり行なうべきであったろう。

紙数の2/3をついやしている第3章、第4章では、都市と農家の生活水準について戦前・戦後の比較、戦後期から現在までの変化、都市・農村の比較、等が豊富な資料を駆使して周到に分析されている。なによりも重要なのは永山、野田の両氏がそれぞれ都市家計調査および農家経済調査について知悉しており、とくに資料の有用さとともに欠陥について、読者の注意をうながしている点である。Frischが1934年に“intimate and realistic knowledge of the data”がなければ経済理論や統計的方法がすぐれていても意味ある分析はできないと警告しているにもかかわらず、吾々は応々にしてこの注意を忘れるからである。

第3章VI節の戦前・戦後の比較の項はその1つの例である。戦前基準指数によれば、29年には戦前水準に回復したことになるが、著者はこの判断に疑問の余地あることを指摘する。消費水準指数は消費支出額を消費者物価指数でデフレートして算出されるから、問題は支出額と物価指数の双方の資料にある。支出額のデータに関して著者は、戦前の家計調査が1種の典型調査であって戦後のような無作為抽出によっていない点を指摘する。とく

に被調査世帯の収入階層の上限が月収100円で切られているために平均値が無作為抽出のばあい比して下方に偏っていたことから、戦前の消費水準が過少評価であることはほぼ確実である。他方で戦前基準消費者物価指数は昭和9~11を基準時とし26年を比較時として、それぞれの費目別ウエイトを用いフィッシャー式でリンクしてあるが、とくに戦後の物価資料で家賃のヤミ価格が把握されていないために戦後の物価が過少評価になることが指摘される。家賃を除いた総合指数は戦前1に対してリンク時で281.5であり、家賃を含めた指数の255.5より10%以上も高くなる。このように戦前の消費支出額が過少評価され戦後の消費者物価が過少評価されれば戦後の消費水準指数は二重に過大評価されたことになり、その指数が昭和29年に100になったとしても実態を示すものではないことを著者は明快に証明している。

第3章は70頁を占め、その内容をひと通り紹介する余裕はないから、とくに興味を惹くとおもわれる点の一部を列挙するにとどめる。Ⅱ節「戦後の消費水準の回復過程では、25年までの混乱期、29年までの回復期、それから現在までの上昇期、に分けて各期間の特徴が整理されている。いわゆる超高度成長期を経た現在では終戦後の赤字家計の記憶はようやくうすらぎつつあるが、社会政策的な感覚を措くとしても、急激に実質所得が低下する時期に家計がどのように反応したかは消費者行動理論の目から見て貴重な実験である。ただ当時の特殊事情が資料の信頼性に大きく影響している点で慎重に扱わねばならないが、この点についても著者のインフォメーションはきわめて有用である。

Ⅱ節では、とくに耐久消費財需要の増加が所得階層別に時間的ズレを示す点が分析されており、テレビその他の新製品の普及状況の推移がロジスティック曲線その他によって捉えられている。この種の分析は市場予測の観点からも利用価値が多く、読者の興味を惹くであろう。類似の興味からすれば、被服費の周期変動の分析もおもしろい。現在ではまだ家庭用乗用車は家計調査にのってこないが、耐久消費財市場が重要な度を加えつつある現在、上のような分析の利用価値は高いとおもわれる。

第4章の野田氏もまた冒頭に、統計測定技術上の問題と、統計資料の不統一の問題とをかかげて正攻法の姿勢をとっている。日本経済が資本主義経済として成熟段階に突入しつつある現在(この点についてわたくしはロストウヤラニス=フェイの認識は誤っていると思う)農家家計の分析はきわめて重要な意味をもつが、その基礎資料たる農家経済調査については農業専門家以外にはあまり

知られていない。その点で、とくに資料そのものについて詳細に論じられていることは読者を益するところが大きい。そして、資料の欠陥を踏まえたうえで分析が行なわれていることは分析結果に対する信頼感を深める。

戦後農家の消費水準の上昇に関しては、まづ5大費目のうち被服、住居、雑費の上昇が大きく、37年までに農村生活の大きな改善があったことが示される。さらに、上昇の鋭い飲食費と光熱費が自家消費のウエイトの高い費目であることを考えれば、上記の3費目の上昇は農家の貨幣経済化の進展、すなわち近代化が進んでいることを意味する点が指摘されている。ただ、戦後におけるこのような農家の消費水準の上昇が、所得水準との均衡を失った消費の先走りであることに注意が喚起される。この点は朝鮮動乱直後の所得水準上昇により急激に引きあげられた消費水準がその後の所得水準停滞に適応できないまま生じた生活標準の急速な引上げによるものであった、と解釈されている。

この問題点に関連して農外収入の階層別差異ならびに時系列的变化が分析されている。戦前では農家所得における農業所得と農外所得との構成比は8:2であったのが、戦後では逆に後者が半ば以上を占める傾向にあり、戦後の農家家計支出が農外所得の増加に支えられて、農家の都市的性格を強めたことが指摘されている。

このほか住居費、被服費、雑費の変化の内容や、農家の貯蓄率、等について興味ある分析が行なわれ、さらに都市生活水準との比較がなされている。

以上不完全であるが本書の構成について概観した。1章から4章までの構成、内容について、適任者を確保した編者の手腕に敬意を表するものである。〔辻村江太郎〕

出 口 勇 蔵

### 『ウェーバーの経済学方法論』

ミネルヴァ書房 1964年9月 262ページ

すでに昭和14年に没価値性論をひっさげて学会に登場し、爾来30年近く方法論の問題と取り組んで来られた著者の最近の諸研究をまとめた論文集である。論点を整理して紹介するだけでも書評の枠をはみ出るであろうし、何等かの評価なり批判なりを下そうとするならば、出発点の『経済学と歴史意識』に遡ってそのウェーバー論の展開の跡を逐一辿るだけの用意がなければならぬ。私はこれを年内に試みる予定でいる。従って今回の書評においては細部には立ち至らず、“出口・ウェーバー”